

悲劇とキリスト教

前田利雄

悲劇の中にキリスト教をもちこむと、悲劇は本来の意味と機能を失うといわれている。Reinhold Niebuhr は「キリスト教は悲劇のかたに立っている。」(“Christianity stands beyond tragedy.”)¹ といい、Richard B. Sewall は「キリスト教はかんたんにいって悲劇ではない。」(“Christianity, to put it briefly, is not tragedy.”)² とのべ、また Lawrence Michel は「キリスト教は悲劇と相容れない、悲劇はキリスト教のもとでは反抗し立ち止まる。」(“Christianity is intransigent to tragedy; tragedy bucks and balks under Christianity.”)³ と指摘する。

では一体 Christian tragedy が存在しないという理由は何であろうか。その理由は悲劇はキリスト教には存在しないからである。「人もしキリストにあらば、新に造られたる者なり。古きはすでに過ぎ去り、視よ新しくなりたい。」キリスト教とは、現世以外の来世に希望をつなぐ。アブラハムは未だ約束の地をうけていなかったが、信仰によりて遙にこれを見て迎へ、地にては旅人または寓れる者なるを言いあらわした。「信仰は望むところを確信し、見ぬものを真実とするなり」(ヘブル 11:1)。キリスト者はこの世の悲しみをすべて神の国でうける限らない栄光を待望し、それを事実と確信してゆくことによって永遠の喜びにかえてゆく。パウロはそれゆえに神の栄光を望む信仰によって艱難を喜び誇り、信仰の同胞にも艱難の奇蹟を語っている。「それ我らが受くる暫くの軽き患難は極めて大なる永遠の重き栄光を得しむるなり。我らの顧みる所は見ゆる者にあらず見えぬ者なればなり。見ゆる者は暫時にして、見えぬ者は永遠に至るなり」(コリント後書 4:17)。

キリスト教とは悲劇を超越している宗教である。イエスは自己の死によって人類の罪を克服し、自己の復活によって人類の罪を義とした。死はその結果その刺を失い、罪はその力を失った。いかなる現世の喪失も来世において報いられ、いかなるこの世の不義も来世の審判で報いられる。かくして十字架は信ずる者にとって悲劇ではなくして悲劇の解消である。これがキリスト悲劇の存在しない理由である。

しかしキリスト教は一切の人の罪と悲しみを現世において解消し得るやという疑問がわいてくる。いかなる罪も人が十字架の贖罪を仰ぐことによって赦されることは事実であっても、その罪の苦い結果はその人と社会に根深く残存して、人と社会は自らその果を刈りとらねばならない。霊において人は赦されし事実を確信しても、肉において人はいぜんと悲しみの子である。人の霊と肉における全き救いは現世において完成せられず、神の国である来世に待たざるを得ない。「われらの国は天にあり、われらは救い主すなわちイエス・キリストの、そこより来たるを待つ」(ピリピ 3:20)。キリストが死を滅ぼし、福音をもって生命と朽ちざる事を明らかにしても、これが我々の霊と肉において完き事実となるのは、イエスが再び現われ給う時である(ヨハネ第一章 3:2)。もう一つの疑問は、宗教的哲学的悲劇と文学における悲劇の混同が生じてはいないか。悲劇とは文学では、環境の犠牲になることでなく、主人公の責任によって生じる災禍をさすからである。その災禍に対して主人公が信仰によってそれを歓喜でみるか否かは問題ではないからである。

Aristotle が「詩論」の中で 12 回も言及したといわれる *Oedipus the King* は彼によってほぼ完全に近い悲劇と考えられた。しかしこの *Oedipus the King* を「運命の残忍な仕業」(“the remorseless operation of Fate”) と考えることほど間違った考えはない。Oedipus が Delphi の神託によって予定され、予め決定されていて、人力ではどうしようもない運命の道を奴隷的に、機械的に辿ったとするならば、Oedipus は運命の手であやつられる人形にすぎない。しかし Aristotle はいう、悲劇とは極端な善人でも悪人でもないが、本質的には善人であり、その人の内面的欠陥 (hamartia) によってある災禍を招く主人公の悲劇をさす。そして悲劇の機能は「同情と畏怖」の感情を観客的にわきおこすことによってこれらの感情を排浄することである。環境の犠牲となる悲劇は同情の念をおこしても畏怖感を与えないので真の悲劇ではない。不完全な我々が主人公の不完全さのゆえに生じる不幸によって主人公が苦しむときに初めて内面的に主人公に同化して畏怖感に打たれるのである。Oedipus は確かに神々によって予定され、変更し得ない運命を辿っているが、彼の性格の中にそれを欲する何かがあって、不幸におちいっているのである。彼は自分の出生をよくしらべないで育ての親の Corinth をとび出した。酒によった青年のいった出生の秘密の侮辱にたえかねたのであるが、知的に解決できると思って Delphi に急ぐのである。しかし神託は彼の質問に答えないで、全く違った答えをする。しかしそれをきいても、それを謙虚にうけないで、十分な警戒を自らにとらなかった。育ての両親のいる Corinth に帰らなければ、父を殺し母と婚する悲劇をさけ得ると考える。彼は Thebe に向から途中三本道の交叉点で Laius の車に道をゆずるのを拒絶したために Laius の怒りを招き、先が叉状のとがった突き棒をふりかざした彼の一撃をかわして彼をひきずりおろして殺す。父と子は両方とも遺伝によって激情的発作の持主であったからである。彼の知性は Thebe で Sphinx の謎を解くべく挑戦をうける。その謎を解答して、母親と同じ位の年上の女王と婚する。彼は理知で解答し得る謎には答えをもっている、自分の人生の存在に対しては解答をもっていない。合理主義と激し易い性格は彼の判断を盲目にする。先王の殺害者の探索において、盲目の予言者 Teiresius の予言をきいて怒り、彼を裏切者とののしり、義兄を叛逆罪で糾弾した。女王の制止もきかずに、真相究明に頑固なまでにいつもの知的解決を試みて自我を押し通した。彼は神々に対して不敬虔な態度をとり、善意の人々に怒りを発した。理知の限界を越えた問題を知性によって究明しようとした。合唱は彼のこの不敬虔さに対して「傲慢は暴君を生む」という。これが Oedipus の hybris である。彼の内面に運命を呼ぶ何かの欠陥がある。しかも運命的な欠陥の発揮される危険なときにも、彼に自由意志というものが与えられていることは注意すべきである。Oedipus の知的傲慢が、彼の滅亡につながることを一早くしった妻 Jocasta の制止は、彼の自由選択の機会であった。しかし彼はそれに従わなかった。Apollo の神意も彼がそれに警告として従うか否かの自由選択の機会である。しかし彼はそれに対して十分な警戒心をとらなかった。彼は自己中心的近視眼的知性と激情的な性格に従う自由を選ぶ。人の自由意志のあるところには、人の責任がある。人の責任あるところには、人の必然の苦難がある。神々の予言があっても、人の行動はそれに束縛されないのである。しかし神々の永遠の不文律を無視するとき、人は苦難に見舞われる。H.D.F. Kitto が「神々は予言するのみで、人を強制しない」(“the gods only predict, they do not compel”)⁴ と Oedipus 劇を批判したのはこの意味である。人は神々の聖なる法則とは無関係に自律的に行動する。人が謙虚に神々の法則に従うかそれとも人の自己中心的な理知と欲望に従うかそれは人の自由意志である。しかし人が神々の深い洞察を無視して、自己に従って hybris におちいり苦難に出会って人生の巨大な複雑性の前に自己の卑小さと無力をしる

とき、初めて人は神々の聖なる存在に畏怖感を抱く。神々は「単に聖なる機械や慣習としてでなく、あらゆる劇の組織の中にとけこんでいる」。

ギリシア悲劇が神々に対する不遜という hamartia によって生じたように、Christian tragedy とは、キリスト教の神に対する不従順という hamartia によって生じた悲劇であると考えすることはできないであろうか。理由はともかく、Milton の *Samson Agoniste's* や Dostoevsky の宗教的悲劇小説（五大小説）は Christian tragedy であることを疑うことはできない。Samson は神によって与えられた力の秘密の誓いを破って女にもらしたことから悲劇が生じる。しかし彼が自分の力の秘密の在り場所を彼女にもらす前に、三度も彼女が彼の教えを秘密を敵に内通していることを経験している。彼女の執拗な攻撃が四度目に及ぶとき、彼は不遜にも本当の秘密を教える。その結果、盲目にされるのである。これは Samson に自由選択の余地があったことを物語る。彼自身がそのことをよく意識している。「傲慢さでふくれあがって、美しい、いつわりの顔と愛の魅惑のわなにおちいった。」「私自身がこれらの悪を招いたのだ、私のみが責任者であり、私のみがその原因である」(“Then swolle’n with pride into the snare I fell / Of fair fallacious looks, venereal trains, ...” “I myself have brought them (‘these evils’) on, / Sole Author, I, sole cause:”)。

Samson は自分の力が脆い髪の中にあるという人間の限界をしらないで、「小さい神のように、敵地を歩きまわって敵人からあがめられ、恐れられた」ことから、傲慢になり、神の誓いを破って盲目的な肉欲の自己に従った。ここから肉体の盲目が生じ、自身が「動く墓」となった。しかし神の意志と和解したとき、彼は神の道具となって神の意志をつらぬき、ペリシテ人を滅ぼす。

「人間のあらゆる善の根底には最も深いエゴイズムがある。ある行為が善良にみえるほど、それだけエゴイズムが多くある」と Dostoevsky はいう。彼は人間の生まれながらの道徳性はそれ自体では悪であることを指摘している。Mochulsky のいう「宗教的悲劇」⁶ が始まるのである。Rascolnikore, Ivan などの理性主義者の世界と Sonia, Alyosha, Dmitri などの信仰の世界との対立が 1866-1880 の Dostoevsky の内面を深刻になやましてきた。この期間の大ロマンが悲劇小説といわれるゆえんである。

Shakespeare の悲劇をみても、主人公が愛よりも正義に価値をおいている「正義の人」の場合に、悲劇が生じている。この正義と愛の対立は *Merchant of Venice* や *Measure for Measure* でわかるように「律法からくる人の義」と「信仰によりて神より賜わる義」（ピリピ 3:9）の対比であることはいうまでもない。人の義——正義は旧約聖書の石板に刻まれた儀文 (the letter of the law) であり、愛——神の義は人のハートに録されている、新約聖書の「律法の霊」(the spirit of the law) である。「儀文は活し、霊は活す」(コリント後書 3:6)。Shakespeare は正義は悪、愛は善と考えた。Shylock は「証文」を律法の義として Antonio の肉一ポンドの要求は「正義」(justice) であるという。Portia が神の愛 (mercy) をといて、Shylock が肉の要求 (律法の文学) をひきさげ、倍額の支払い (恩恵) をとるように彼にすすめるが、Shylock は正義と証文の主張をやめない。Portia はついに同じ律法の義に従って Shylock をさばく。証文には血一滴でも流してよいとかいていないからである。「(汝の) 要求している正義」(“the justice of (thy) plea”) は神の愛によって緩和されなければ、自己をも他をも破滅に導く。しかし愛は功なくして与えられる。

In the course of justice none of us
Should see salvation.
The quality of mercy is not strained
It droppeth as the gentle rain from heaven
Upon the place beneath.
And earthly power doth then show likest God's
When mercy seasons justice.

愛（神の恩恵）を拒絶して正義（肉の要求）を主張した Shylock の悲劇はこの作品より八年後に *Measure for Measure* で神の恩恵と人の義の対比としてももう一度とりあげられる。恩恵の人 Duke は神と人との関係は、人と松明の関係であるととく。人が松明に火を点じて初めて松明は光りを放つ。光りは自ら流れでてゆき、自分のためでなく、他のために光りを放つのである。恩恵が人に無償で与えられることによって道徳的善 (virtue) が人から流れ出る。しかし人が自らの力で道徳を行なおうとすると、人は善をなし得ないで悪をなす。人の正義は汚れた衣の如し。しかし Angelo は律法こそすべてをたてる義であるという「正義にして厳格なる」(“just but severe”) 人である。婚約中に恋人をはらました Claudio に死刑を Angelo は言い渡す。Claudio の妹 Isabella は「怒れる律法から兄を贖う」(“redeem (your) brother from the angry law”) ために Angelo に救を求める。Isabella は Angelo の無慈悲に驚き、律法の義によって人は義とされず、恩恵によってのみ人は救われることをとく。(How would you be, / If He, which is the top of judgement, should / But judge you as you are? O! think on that, / And Mercy then will breathe within your lips, / Like man new made.) しかし Angelo は律法の義こそ慈悲であるといって、自己の義を聖なるもので装う。

It is the law, not I, condemn your brother.
I show it (pity) most of all when I show justice,

Isabella の去ったあと、しかし Angelo は律法の義が肉の義であることをあらわす行動をとる。Isabella のしとやかな美しさ (‘virtue’) に対する欲情をおさえることができない。

Most dangerous
Is that temptation that doth goad us on
To sin in loving virtue.

Angelo は兄の命と交換で Isabella の貞操を要求する。行為によって、報酬によって自己を義とする律法主義の誤りであり、又弱点である。律法（道徳）は人を罪に導くからである。苦境に立った Isabella はしかし Duke の恩恵によって救われる。Angelo にかって愛されのち捨てられたが今も彼を愛する Mariana が Isabella に扮して真夜中に Angelo と出会い、Angelo の要求をみたす。しかし Angelo は約束を果たさず、Claudio の刑の執行を命ずる。これも Duke の愛で救われる。Angelo は Duke によって裁かれるが、恩恵によって Mariana と婚することによって赦される。「外見は天使 (angel) でもその内側には何をかくしているかわか

らない」Angeloの悲劇は正義の悲劇である。この *Measure for Measure* の思想は Shakespeare の悲劇や史劇においても基調となる重要なものである。

Winter's Tale は「人の正義は暴力である」という思想で貫ぬかれている。Leontes は嫉妬に狂い、妻 Hermioni を「正義にして公開の裁判」で「自分の正義を感じさせ」ようとして「自分の正義が暴力」となって人をも自己をも悲劇に導く。

[Antigonus to Leontes]

Be certain what you do, sir, lest *your justice*
Prove violence: in the which three great ones suffer
Yourself, your queen, your son.

Leontes と同じく嫉妬の暴君となって愛を裁き殺害する Othello も正義に対して異常な関心を払う。正義の性質がのべられているのではなく、正義と愛の対立が問題とされているのは *Measure for Measure* と同じである。正義と愛は律法と恩恵と同じく二者択一の問題でない。恩恵が律法の終りであるように愛は正義の終りである。愛と義は全く関係がないのに、Othello は「愛を理性の法廷にもちこむという誤りを犯す。」⁷ 殺害のシーンは Othello が自己の義の復讐を神の義の衣でおおって正当化しようとするのを見る。裁判、ざんげ式、犠牲の供えもの、刑の執行という複数の儀式化を Othello 独りで演技する。

It is the cause, it is the cause, my soul;
Let me not name it to you, you chaste stars!
It is the cause. Yet I'll not shed her blood,
Nor scar that whiter skin of hers than snow;
And smooth as monumental alabaster.
Yet she must die, else she'll betray more men.
O perjur'et woman! thou dost stone my heart,
And mak'st me call what I intend to do
A murder, which I thought a sacrifice.

殺害のあと、妻の潔白がわかったとき、Othello の「正義の地盤」(“just ground”) はくずれるが、彼の正義はなおも自己欺瞞をつづける。

An *honourable murderer*, if you will,
For nought did I in hate, but all in honour.

Hamlet において人は律法の義と霊の義の対立が Othello の義と愛の対立と同じく、Shakespeare の思想の中核を占めているのを見る。Renaissance の劇作家は霊的なものをあらわすとき、亡霊 (spirit, ghost) を用いる。亡霊は Hamlet に復讐をせよという命令 (“commandment”) を与える。しかし「汝の魂を汚すな」という条件をつける。矛盾した二つの命令は何故であるか。それは「律法は霊的である」(the law is spiritual) (ロマ 7: 14) から、「罪のもとにうられていて、肉的である」ものが霊なる律法を果たすことはできない。亡霊と

いう霊なるものの命令を果たすには、憎悪という肉の力ではできない。霊なる亡霊の命令は霊的な力によってのみ、すなわち、「汝の魂を汚さない」ときにのみ果たし得る。神の恩恵と霊によって果たすべし——「彼女を天にまかせ」(“leave her to heaven”)て決して自己の知力にまかせて企てるなかれというのである。⁸ しかし Hamlet は Angelo と同じく、霊からの命令を自己の正義と理性で果たそうとして、憎悪にかられる。「律法によって罪がしられる(罪と婚する、罪を犯す)」(ロマ 3:21)と Paul がいったように、Hamlet は地獄と婚する(“and shall I couple hell?”) Hamlet は逆上し(“madness”の罪)、Polonius を殺害し、悪魔的な理由によって祈る王の命をのぼし、母に対する企てを犯す。Paul のように自己の義を打ちたてようとする者は罪と死に至る(ロマ 7:9~10)。Hamlet が自ら企てることをやめて、摂理の道具として神の意志に支配されたのは「道の変化」(sea-change)を経験したあとである(There is a special divinity that shapes our ends, / Rough-hew them how we will.)。父を殺されて Hamlet と同じ境遇の Laertes が Claudius に「支配され」彼の道具(“organ”)になって企てをなし、毒と剣を芝居の形で装うのとは全く対照的である。彼に禍した彼の無分別でさえ、今や抑制されて彼に益となる。(“Our indiscretion sometimes serves well / When our deep plots do pall.”)。彼は神の与える機会を待てばよい(“Readiness is all”)。彼らの企てたわなに彼ら自らが落ち入り、彼らの悪意は実演中にばれて、彼らの滅亡のもとになる。

Shakespeare の悲劇の主人公は例外なく自己の義を打ち建てたことから悲劇をおこす。そのとき、主人公は機械的に、運命的に動かされているのではなく、自由意志によって自己の義につっ走っている。Othello は Emilia によって Desdemona への猜疑は彼自身の心を欺むくので猜疑心を早く捨てるようにすすめられる。しかし Othello は一層かたくなになる。Leontes は Paulina の諫止や神託の洞察があつたにもかかわらず、ギリシア悲劇とひとしく、自分の欲望に従う。Hamlet は復讐を憎悪でなしてはいけなさと亡霊からいわれて自由選択の余地を与えられていながら、霊でなく肉によりたのんで、地獄の叛逆をおこす。Othello も自ら Emilia に出向いて相談し、Leontes も Apollo に神託を求めて人をつかわし、Hamlet も亡霊の言が正直であるか否かと彼の良心が苦悩する。すべてギリシア悲劇と同じく、警告を与えられて、それをさけようと努めておりながら、欲する善は之をなさないで、憎む悪は之をなししている。このように自由選択がある限り、又そのために迷いの苦悩をうけている限り、その自由選択によって招いた悲劇には主人公は責任をもたざるを得ない。Shakespeare の悲劇は主人公が信仰による神の愛又は霊を拒絶して、人の正義と理性に従う自由を選んだことからおこっている。John Vyvyan が Shakespeare において正義(justice)が、「悲劇の無限のくり返しを生む第一のもの」(“the prime begetter of the endless recurrences of tragedy”)⁹と定義したのもこのゆえに外ならない。何故なら、正義は人を憎悪に走らせ、その人の性格の欠陥を表にひき出し、狂暴さや盲目的判断に導くからである。それに反し愛と霊は贖罪的、犠牲的、調和的であり、従って創造的である。愛(mercy)なくして人は救いをみないのである。「正義の遂行には救いがない」なら、「創造的愛なくしては救いがない」。Desdemona や Cordelia の mercy は、justice と反対に、悲劇の解消というより悲劇の贖いである。

このように主人公がキリスト教的愛に従うか人の義を選ぶかによって不幸が決せられると

† He presents the old law—which the Church itself still practises, despite the Gospel—as an ancient barbarity, the prime begetter of endless recurrences of tragedy. (I. Ribner, *The Shakespearean Ethic*, p. 113)

き、この悲劇を Christian tragedy ということはできないであろうか。ギリシア悲劇の主人公がギリシアの神々の聖なる法則に従わず、自己の理知と欲望に従う自由を選んだことから性格の欠陥を表にひき出し判断の誤りを生み、それによって悲劇におちこむことをギリシア宗教的悲劇というならば、ギリシアの神々の代りにキリストをおき、人の理知の代りに人の正義とおきかえれば、これを Christian tragedy ということはできないであろうか。

Shakespeare は神を明示しないで、人物の行動を通し、又行動の中で、又行動を超えて神を示唆するにとどまる。Sophocles の神々が予言をしても、人の行動を規制しないで、人の自由に任しているのと酷似する。

自然界の法則が自然の物体の行動を強制しないが、それを無視して行動をとると、自然の物体は損傷をうける。そのように人が永遠の神々の不文律やキリストの恩恵に叛逆する行動をとるとき、その人が信仰者であろうとなかろうと、それには無関係に、不幸を招く。それによって初めて人は世界認識と自己発見に至る。Sophocles や Shakespeare の主人公がすべて自己認識に至る過程を辿っているのはこのためである。

Shakespeare は抽象的な自然法 (natural law) や教義としての恩恵には何の関心も示さない。Paul が人の内面における信仰の霊性と肉の欲情の間の深刻な葛藤から神を見上げていったように、Shakespeare も人の正義という自我と神の愛という他者への愛の葛藤を通してあらわれる具体的な人の行動に最大の関心を示した。“Nature” (大自然) と “nature's mischief” (肉体の悪) の葛藤、恩恵 (grace) と道徳 (virtue) の対立が人の肉体を舞台としていかなる行動をとってゆくかをえがいた。Dostoevsky の 1846 から 1864 までの作品には、宗教的テーマがどこにもあらわれていないけれども、1866 から 1880 までの時期の大小説悲劇には宗教的テーマが第一の支配的地位を占めるといわれる。Shakespeare の作品もある時点を境として深い切り込みをもって、宗教的悲劇テーマが君臨していると考えられる。客観的にこの事実が存在するとき、Tillyard のいうように人はそれに叛逆しても、否定はできないのではなかろうか。¹⁰

Modern critics may not like the religious drama, but it is certainly erroneous to prize it for the thing it was not and to think it important only when it ceases to be itself.

Hardin Craig

(52. 1. 24. 完)

References

1. Reinhold Niebuhr, *Beyond Tragedy* (New York, 1965), p. 161.
2. Richard B. Sewall, *The Vision of Tragedy* (New Haven, 1967), p. 157.
3. Lawrence Michel, *The Possibility of a Christian Tragedy*, p. 427, quoted in R. B. Sewall, *op. cit.*, p. 156.
4. H. D. F. Kitto, *Greek Tragedy* (London, 1966), p. 147.
5. Meyer Reinhold, *Ten Greek Tragedies* (New York, 1965), p. 73.
6. K. Mochulsky, *Dostoevsky* (New Jersey, 1971), p. 216.
7. Winifred M. T. Nowottny, “Justice and Love in Othello” in *The University of Toronto Quarterly* XXI (1952), p. 333.
8. Roger L. Cox, *Between Earth and Heaven* (New York, 1969), pp. 51-64.
9. John Vyvyan, *The Shakespearean Ethic* (London, 1968), p. 113.
10. E. M. W. Tillyard, *The Elizabethan World Picture* (London, 1968), p. 29.

附 記

この論文は 52 年度の「北海道英語英文学」第 22 号に応募して不採用になったものである。不採用になった理由は、第一に内容の劣りしたためであると思うが第二の更に大きい理由は、この論文の背景となる思想が北海道英文学会のそれを抵触したからである。

この論文の骨子は「Shakespeare の正義観」と題して 51 年度の北海道英語英文学会で口頭によって発表したものである。そのときの司会者、北海道大学の平善介氏より、私の発表内容について異議がとなえられた。氏によると、Shakespeare をキリスト教的に解しすぎることは危険である。キリスト教的解釈は最近の傾向であるが、それはあくまでもそういう解釈もあり得るという一つの可能性にすぎないというのである。私はこの質問と意見を素直にその後検討してみた。そしてこの御質問に答えたものが私の上の論文「悲劇とキリスト教」である。しかし題材はすべて口頭発表による「Shakespeare の正義観」からとったので、口頭発表の内容がこの論文の素材となっている。

Shakespeare の悲劇がキリスト教的であるということは、一つの可能的解なのかそれとも客観的な事実であらうか——後者であることが今までは欧米の学者によって疑うべからざる事実として証明されている。John Vivian, G.R. Elliot, R. Heilman, Peter Milward, I. Ribner, Dolora G. Cunningham, Elenor Prosser etc. である。日本で最も親しまれている P. Milward の「キリスト教と英文学」はとくに日本の学生のためにかかれた名著であり、日本の英文学界にとっても画期的な名著である。大家 P. Milward の Shakespeare 観を紹介すれば、私の論文が間違っているか否かもよくわかるであろうと思われる。

Peter Milward によれば、「Shakespeare はイギリスの詩人の中でもっともキリスト教的であるといってもおかしくない。」その理由は Shakespeare がキリスト教の「罪の現実」にまっこうからとりくむからである。……Shakespeare は宿命論者でない。運命の概念は認めながらも、人間の自由と神の召し出しを コンテキストとして 悲劇の筋を発展させる。」（「キリスト教と英文学」131-132 頁）そして人の罪を追って地獄まで道をたどる Shakespeare であるが、それは罪によって人の滅びるのを喜ぶためでなく、地獄におちた人の罪が、初めて自己に目ざめて、神の救いをキリストのつぐないによって待ち望み、「和解の道を天にまで上昇する」ためである。

そして Milward はこの罪の主人公を *Hamlet*, *Othello*, *Brutus*, *Macbeth* にとり、*King Lear* においては悲劇が頂点に達しているという。「リア王」はその他の三大悲劇と違ってキリスト教的背景をもたないが、それにもかかわらず、本質においては深くキリスト教的であるという。リア王は自分の罪の結果、苦難におそわれるが肉につけるものをすべて奪われ、失ったあと、裸の Edgar に自己の姿をみて初めて「自己の真の姿を知り、Cordelia を追っ払ったあやまちを悔いて、そのゆるしを求めるようになる。かれが Cordelia と和解する場面は、それまでの離反の悲しみをつぐなって余りあり、これを秘跡によって人間性と神の恩寵が一致するアレゴリーであると解釈して、少しもおかしくない。」

このように解するとき、キリスト教的悲劇が可能であるかどうかなど、問題になりようがないことになるように Peter Milward は断定する。

しかしここで用心深いこの学者は、世間でよくいうキリスト教には悲劇なしという異論を取りあげてそれを反論する。人間の最高悲劇である十字架のイエスの死は、罪と死に対する人間の最高の勝利であることから、人間の悲劇はダンテのいう「神の喜劇」であるかもしれない。

しかしこのことが悲劇を破壊するものでないと Milward はいう。

ところでこの点にこそ、暗い上にも暗い罪の暗さがある。この点にこそキリスト教悲劇の本性がある。罪をつぐなうキリストの苦しみではなく、キリストがつぐなわなければならぬ罪の方に、あるいはむしろキリストのつぐないにもかかわらずなおも罪に執着する罪びとの方に。このためにこそ、ほんとうにキリスト教的な悲劇もあり得るし、また、キリスト教の光をもってしなければ探れないような人間悲劇の深淵もあるのだ。

(「キリスト教と英文学」138頁)

Shakespeare の悲劇はキリストその人の苦しみでなく、キリストがつぐわなければならぬ罪人をキリスト教的なアプローチで処理している。人の罪と神の恩寵の対立の中で、人の罪を救いの光によって深く浮彫りにし又神の光りを人の罪の暗さによって一層ぬきんでて鮮やかならしめながら、あくまでも人間の実在に焦点を合わせて、罪の心理を探究してゆく。観客はその罪に自己の罪をみとめるとき、一層劇の効果はたかめられる。

このように大家の分析をみても、Shakespeare とキリスト教は切りはなせない関係に立っている。私の論文が時の試練にたえないものか否か——それは後世の批判に待ちたい。

北海道英文学会に提出したときと全く同じ形で、一行も添削しないで発表する。25枚の制限があったので、充分に意をつくし得ないうらみは残るが。

学問は仮説から成立する。その仮説が実験のくり返しによって証明されたときそれは事実となる。ある仮説を真向から否定するには、それなりの根拠がなくてはならない。否定することさえ、一つの仮説にすぎないことを知っておくけんきょさが学問にはなくてはならない。ある仮説を否定し去ることは、その人の説が絶対的権威である場合のみである。ある学者が矢内原忠雄を東大助教授として迎えるとき、キリスト教者であるから矢内原には偏見があると批評した。それをきいた矢内原は、そういう考えこそすでに偏見であるとおつぱねた。この事実は我々に深い教訓を与えるのではなからうか。学者は対象を偏見なく、主観をぬいて対象それ自体をとらえねばならぬ。自己をすてて何物にもとらわれぬ精神の自由が学問には絶対条件である。この何物にも煩わされない、自由な心——キリスト教のみが可能であると Hegel がいったのは至言である。しかも Shakespeare 自身にその Christianity がその骨の髄まで浸透しているとき、それを否定することは Luther や Calvin に Christian faith を否定すると同じく不可能のように思われる。読者諸氏の批判を待つ。

20世紀最大の Shakespeare 学者 Heilman と並ぶアメリカの学者 G.R. Elliott の Shakespeare 観を引用しよう。

He lived in an age of religious questionings, disputes, and doubts; and no mind was more inquisitive and searching than his. Yet in his writings, though often very critical of Christians, he never slurs Christianity; his writings, together with the little we know of his life, evinces a deep and firm regard for the Christian doctrines. But his total work, when read impartially, testifies that the author, unlike the majority of his contemporaries, viewed the current forms of those doctrines with a marked detachment. Such is his attitude towards Original Sin, Damnation (more properly, Condemnation), Incarnation, Atonement. His *explicit*

references to them are few and casual; and these passages, couched in the contemporary terms which were natural for the *dramatis personae* who utter them, cannot be taken as precisely representing the dramatist's own opinions. The truths underlying those terms, however, are implicit in and basic for Shakespearean drama as a whole—a fact increasingly recognized by modern scholars. For instance, one of them speaks of the “essentially Christian spirits of the tragedies” and notes that the “sense of reconciliation which remains to comfort us may well be called a sense of *atonement*” (*italics author's*).¹

1. From C.J. Sisson's “The Mythical Sorrows of Shakespeare” in *Proceedings of the British Academy* (1934).

(G.R. Elliott, *Dramatic Providence in Macbeth*, p. viii.)

(原稿 本文 25 枚 附記 10 枚, 52. 10. 3 (月) 提出, 山ぶどう実る 西岡の秋)